



Title	西垣内・西山論争を読み解く：何が生産的議論を阻害するのか
Author(s)	山泉, 実
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2025, 2, p. 185-216
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100807
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

西垣内・西山論争を読み解く

—何が生産的議論を阻害するのか—*

山 泉 実

キーワード：論争 非飽和名詞 変項名詞句 指定文 潜伏疑問文

1. はじめに

指定文や潜伏疑問文に関して、『言語研究』『日本語文法』、その他の媒体で西垣内泰介氏と西山佑司氏（および西川賢哉氏）の論争（以下、「西西論争」）が続いている（西垣内 2016c, 2017, 西山・西川 2018, 西垣内 2019ab, 2023ab, 西山 2023, 西垣内 2024, 他）。日本の言語学界の主要な媒体を舞台にしての論戦は、近年稀に見るものである。筆者は日頃、日本の言語学界に論争が少ないことを物足りなく思っており、この論争があること自体は歓迎しているものの、両者の議論には相手方の説についての誤解や、双方の前提の違いに由来する齟齬などが散見され、論争が実りをもたらさないことを憂慮している。そこで本稿では、西西論争が今後より生産的なものになるべく、また、論争の読者の理解に資するべく、論争を検討していく。論争にどちらかの陣営として、あるいは第三の陣営として参入するわけではなく、一步引いた立場から、論争の両陣営の齟齬を明らかにし、地ならしをすることを目的とする。その過程で、言語学、ひいては学問一般において、立場を異にする者同士のコミュニケーションが失敗する要因をも、西西論争という実例の分析を通して探っていきたい。

なお筆者は、現在は独自の枠組み（山泉 2020ab 他）で名詞句の意味論・語用論を研究しており、論争のどちらの見解をも支持するものではない。しかし、筆者は過去、西山（2003 他）の枠組み「N-意味理論」で研究をしていたことがある（山泉 2010, 2013。もっとも、現在は、N-意味理論批判の急先鋒である（山泉 2021ab, 2022, 2023, in prep)）。そのため、筆者が西西論争を完全に中立的な目で見ることが不可能である。幸いにして、西垣内説を批

* 本研究は、科学研究費（課題番号：22K00553「存在文とコピュラ文の解釈多様性と形式的統一性：指示参照ファイル理論による解明」）の助成を受けて行われている。第2節の主な内容は、「西垣内西山論争における齟齬：非飽和名詞の定義と“翻訳”を中心に」と題して、第169回日本言語学会のワークショップ「論争する言語学の過去・現在・未来：議論を深め、実りあるものとするために」で発表された。本稿執筆までに、発表や草稿に対してコメントをくださった多くの方々に深謝する。

判する西山・西川（2018）、西山（2023）に対しては、既に西垣内氏本人が論争において数多くコメントしているため、本論文では、西垣内氏の見解を中心に議論していく。以下、2節では非飽和名詞についての見解、3節では変項名詞句についての見解を検討する。西西論争の中心的な話題となっている指定文・潜伏疑問文については、別稿を用意している。

2. 非飽和名詞（句）とそのパラメータの値：「非飽和性」の不合理」を合理化する

最近出版された西垣内（2024）は、西垣内（2020）を批判することを目的とした西山（2023）への応答であり、その中で西垣内氏は、西山（2003）の「非飽和名詞」という概念の自らの詳細な理解を、西山（2003）の定義の西垣内氏による翻訳として、そこに至るまでに抱いた疑問や紆余曲折とともに明示している。その翻訳は、後述するように筆者の考えでは体系的な誤解に基づいた誤訳といえるけれども、西垣内氏がいわば母語のようなものとして抱いている前提・視座が反映されたものであり、そこに至る過程も含めて深読みすることで、両者の見解の相違の根源が見て取れる。そこで本節では、西山（1990、2003 他）が提唱する非飽和名詞とそのパラメータという概念を、西垣内（2024 他）がどう理解したのかを西垣内（2024: 2 節）を中心に検討していく。

これを追うことは、N-意味理論や西西論争に馴染みのない読者にとっては、かなり認知的な負荷の高い作業になりかねない。なぜなら、西山氏の提唱する概念と西垣内氏によるその歪められた理解を、筆者という不可避免的に歪みをもたらすフィルターを通してほぼ同時に理解していくことになるからである。負荷を下げるために、以下では次の手順を踏む。まず、西山（2003 他）の非飽和名詞とそのパラメータの値という概念を紹介する。次に、この概念を西垣内氏がどう理解・誤解したかを簡単に記述する。その後で、筆者のその判断を西垣内（2024 他）を引用しながら裏付けていく。

2.1. N-意味理論の非飽和名詞とそのパラメータの値とは：筆者の理解

まずは非飽和名詞とそのパラメータの値という概念を紹介する（詳しくは、山泉 2013）。日本語には、「社員」と「会社員」、「作曲家」と「作曲家」、「犯人」と「犯罪者」のような、類義語のペアがある。これらの意味のどこが異なっているかという点、「社員」と「会社員」を例にとるなら、近くに朝日新聞の社員1名とアップルの社員が2名いる場合に、「ここに会社員が3人いる」というのは状況の適切な描写だが、「ここに社員が3人いる」というのは適切ではない。¹⁾「会社員」はどの会社に雇われているかを問わず、どの会社に雇われて

1) アップル社が話題になっている場合には、「ここに社員が2人いるから聞いてみよう」のように言うことは自然である。興味深いことに、大企業が話題になっている場合には、「ここに社員が3人

いる人でも等しく会社員という集合に属しているとみなせる。一方、「社員」の場合はそうではなく、どの会社かを決めなければ、その人が社員であるかどうかを決められない（会社は特定の会社である必要はない。例「大企業の社員」）。どの会社かが決まってから会社ごとに社員の集合ができるということである。同様に、名詞でカテゴリー化を行うに際して、「作曲家」の場合は曲（例「ヘクサメロン変奏曲」の作曲者は、{リスト、ショパン、チェルニー、エルツ、ピクシス、タールベルク}）、「犯人」の場合は事件（例「大津事件の犯人は、{津田三蔵}」）を定める必要がある（{} は集合を表す）。曲や事件のような変項が定まることでできる集合を西山（2003 他）は外延と言う（西垣内（2024 他）の解釈はこれとは異なることを後述する）。このように、カテゴリー化を行うに際して、関係する要素を定めるというプロセス―「飽和化」と呼ばれるプロセスの一種―を経る必要がある名詞を非飽和名詞といい、そうでない名詞を飽和名詞という（なお、あらゆる非飽和名詞が類義の飽和名詞を持つわけではない）。そして、定める必要がある変項を非飽和名詞のパラメータといい、それを定める要素をパラメータの値という。

以上の見解を、西山（2003: 34）からの引用で裏付けておく。そこでは、「非飽和名詞（句）NP₂ とパラメータの値 NP₁」という意味関係の「NP₁ の NP₂」（タイプ D）の例「この芝居の主演」について、次のように述べられている。

注意すべきは、このばあい、「この芝居」は、「主演」の集合のなかから部分集合を選択するという機能を果たしているわけではないという点である。（そもそも、「主演」のような非飽和名詞について、その集合を問題にすることはできない。）非飽和名詞「主演」は、「芝居 X の」というパラメータの値を設定してはじめてその外延が定まるのである。

パラメータの値を定めることで定まるのは、潜在的指示対象の集合 {a, b, ...} であって、指示対象そのものではないことに注意されたい。非飽和名詞を用いて指示する場合には、パラメータが定まってできた集合の要素の一部（場合によっては全部）が選ばれる必要がある。例えば、「朝日新聞の社員が来たから居留守を使った」と言った場合、普通は社員が全員来たわけではなく、来たのは 1 人 2 人である。この場合は聞き手が特定の社員を「朝日新聞の社員」の指示対象として付与することはなさそうだが、「朝日新聞のあの社員が～」と聞いた場合は、特定の人を「朝日新聞の社員」の指示対象として付与することが期待されている。これは、飽和名詞の潜在的指示対象の集合からその集合の要素の一部（場合によっては全部）を指示対象として選ぶ必要があるのと変わらない。例えば、「あの猫がまた来たからおやつ

いるから聞いてみよう」というのは特定の企業の場合と対照的に不自然である。

をあげた」と聞いた場合に、特定の猫を「猫」の指示対象として付与することが期待されているのと全く同じである。この指示対象付与のプロセスも「飽和化」の一種であり、区別する場合は、非飽和名詞のパラメータを定めるプロセスを A タイプの飽和化、指示対象の付与を B タイプの飽和化という（峯島 2013: 4.2）。

以上は形式との対応関係を棚上げした意味論・語用論の議論である。したがって、パラメータの値は、これまでの例のように非飽和名詞の前に属格の「の」を伴って名詞句で現れる必要はないし、話し手・聞き手の間で了解済みならいちいち言語化する必要もない。パラメータは非飽和名詞が潜在的に持っている意味的変項であり、その値が意味論的に定まらなければ飽和したとはみなされない。また、ここまでは名詞に限って議論してきたが、山泉（2010）、西川（2013: 183-184）では、語彙項目レベルだけではなく名詞句レベルでも同様の非飽和性を考えるべきだと主張されていて、西山・西川（2018: 183）では、西川（2013）の議論を承けて句のレベルの非飽和性も認めている。たとえば、「いちばん好きな食べ物」は（それ単独では外延を決定できないという意味で）非飽和名詞句で、「太郎」が（それによって外延を決定できるという意味で）そのパラメータの値になると分析されている。なお、飽和名詞の外延については、その名詞によって記述される存在物の集合であると考えてよい。

西山氏（及び一番弟子と目される西川氏）は、主著（2003）のタイトル『日本語名詞句の意味論と語用論』に代表されるように、意味論に第一の、語用論に第二の関心があるようだ。統語論への関心は第三と言ってよからう（彼らの論文集『名詞句の世界』の副題「その意味と解釈の神秘に迫る」の「意味」と「解釈」は、意味論の意味と語用論の意味に対応する）。一方、西垣内氏の第一の関心は統語論にあると筆者は考える。意味論に大いに関係のある現象を考察する際にも、常に統語論をベースにして、統語構造とともに考察しているからである。²⁾そのような姿勢は西山・西川両氏には見られない。

これも西山・西川両氏と対照的なことだが、西垣内氏は、意味論として形式意味論を想定している。たとえば、西垣内（2020: 40）は、関数名詞句の主要部名詞の働きを意味論的に表示すると、次の述語 P によって示されると述べ、形式意味論の式（続く解説については

2) これと関連するのかわからないが、西垣内氏の論文では、言語表現を表す場合だけでなく、その意味・指示対象を表す場合にも「」が使われて、次の「東京」のように、どちらを表しているのか判然としないことがしばしばある：「恐らく「指定文」の焦点要素、「東京が日本の首都だ。」における「東京」が「日本の首都」の「外延」にあたるのだらうと考えられる。」（西垣内 2024: 21）次を見ると、あえて区別していないようにも見える：「本論文では、「首都」を国（名）と都市（名）の「関係」を表す 2 項述語であると考える。」（西垣内 2020: 38）西垣内説の重要概念である「識別子」にもこのような問題がつきまとっている。この点については別稿を用意したい。また、「指定文」のような術語も頻繁に「」を伴って用いられていて、「」が転嫁的に、つまり、自分是指定文とはみなさないが指定文と呼ばれているものを表しているのか、単なる強調のために用いられているのかも判然としないことが多い。

後述）を提示している。

$$(1) \text{Max} (\lambda x.P ([\alpha], x)) = [\beta]$$

限定する働きを持つ α と P という関係を持つもの（さまざまなタイプの実在物）の集合の中で最大の値、もっとも好ましいケースが唯一の存在であって、直感的には外項 α によって限定される P の「値」を過不足なく指定するのが内項を占める β のはたらきである。（pp. 40-41）

一方、N-意味理論は明らかに形式意味論ではなく、このような論理式による表示を用いない。形式意味論の研究者が皆、意味としての存在物とその集合やそれらを結ぶ関数が言語使用者の頭の外にあると考えているとは言えないけれども（窪田 近刊）、N-意味理論はそのような考えと鋭く対立する内在主義を標榜している（西山 2019）。そのため、N-意味理論は、西垣内氏の理論に比べて、遥かに集合論的概念への依存度が低い（cf. 西山 2005）。しかし、非飽和名詞の定義の部分には、例外的に「外延」という用語が用いられている。もしかすると、このことが誤解の遠因になったのかもしれない。つまり、「外延」という用語が西山（2003 他）で用いられていることから、西垣内氏が、N-意味理論も形式意味論と同様に集合論的概念を元に意味を合成しようとしていると誤解したのかもしれない。その真偽はともかく、論争の両陣営の興味・立場の違いは、この論争を読み解く上での鍵となる。

2.2. 非飽和名詞とそのパラメータの値とは：西垣内氏の理解（の筆者の理解）

さて、非飽和名詞とそのパラメータの概念を西垣内（2024 他）がどう理解したか、裏付けは後回しにして筆者の理解を述べる。西山氏との大きな違いだが、西垣内氏は、非飽和名詞はパラメータを定めなくとも、潜在的指示対象の集合を作ることができると考えている（西垣内 2024: 19）。西垣内（2023b: 44）に、X の愛車：{プリウス、カローラ、フィット、…}、X の愛犬：{ラッキー、ゴンタ、ボチ、…} というリストがあるが、この集合はそのようなものとみなせる。次は筆者の外挿ということになるが、「作曲者」だけで、なんらかの曲を作ったことのある者の集合に対応するということになるし、「犯人」だけでなんらかの犯行を行った者の集合に対応する。「社員」と「会社員」の外延は同じということになる（外挿終わり）。西垣内氏にとってのパラメータは、統語論に、つまり樹形図の中に位置付けられるもので、飽和・非飽和の区別は、問題となる名詞の句レベルの投射の中にパラメータの句が含まれていれば飽和、そうでなければ非飽和ということになる（西垣内 2024: 19）。西垣内氏は、パラメータの句が主題化などのために句レベルの投射から外に移動してしまうと、飽和名詞句

であったものが非飽和名詞句になるのだろうか」と疑問に思っている (2023a: 42)。³⁾一方で、西垣内氏は、パラメータは、然るべき統語的位置にあれば、移動の痕跡 *t* でも、空代名詞 *pro* でもよく、「投射の中にパラメータを含むことになる点では変わらない」(西垣内 2023a: 42) と考えている。「外延」という概念も、統語論における句レベル投射に相対して理解され、潜在的指示対象の集合ではなく、指示対象と理解される (西垣内 2019a: 39)。以上の理解は、以下に示される西垣内氏の関数名詞句の考え方をベースにしてなされたものであると考えられる。

「関数名詞句」主要部はその内項に対して意味のレベルにおいて「潜在的リスト項目」を選択している [...]。この段階で得られるのは「X の {愛車／愛犬}」の「潜在的リスト項目」であり、外項の位置に現れる表現「山田さん」によって X の値が決定され、「潜在的リスト」が限定されると考えられる。(西垣内 2023b: 44)

関数名詞句の主要部が「愛犬」だとすると、関数名詞句の内項は「ラッキー」のような個々の犬 (の 個体識別子) で、潜在的リストというのは、{ラッキー、ゴンタ、ポチ、...} のような犬のリストだろう。そして、「X の愛犬」の X が「山田さん」と決まると、リストが、{ラッキー} に限定されるということだと筆者は理解した。⁴⁾なお、詳しくは後述する関数名詞句の統語構造 (図 1) を仮定すると、非飽和名詞のパラメータに当たる要素は、NP の指定部にあることになり、非飽和名詞が主要部 N にあると、それと直接結びつくことができない。したがって、非飽和名詞がパラメータの値とまず結びついて外延が決まるということにはならない。この点は N-意味理論とは対照的である。以上が筆者の理解である。

3) N-意味理論では、そのようなことはない。カキ料理で本場のパラメータが埋まっている「広島がカキ料理の本場だ」から「カキ料理は広島が本場だ」を派生して、「カキ料理」が「本場」を主要部とする名詞句の外に出て、名詞句「本場」はカキ料理によって飽和したままである。

4) 次のように書く西山・西川 (2018: 178) は、外延やパラメータの意味についての彼我の差に気付いていないようである。

(i) 東京が日本の首都だ。

「[(i)] [東京が日本の首都だ。] において「首都」はそれ単独で外延が決定できないという意味で、西山 (2003) の言う非飽和名詞であり、その外延決定のためにはパラメータの値が要求され、(i) では「日本 (の)」がそのパラメータの値になっている。このパラメータが西垣内 (2016) の言う外項にはかならない。」西山・西川 (2018) の理解では、外項を要求するということは、非飽和名詞のパラメータを埋めることであり、外延である集合を決めるにすぎないが、西垣内説においては、外項を埋めることで、指示対象が決まることになる。

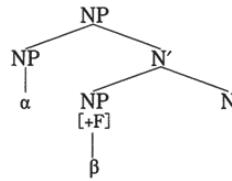


図1 関数名詞句の統語構造（西垣内 2023b: 38）

西垣内（2024）には、「非飽和名詞」が「外延」に言及するものであるという点が「関数名詞」（より適切には「関数名詞句」の主要部）と区別するもっとも大きなポイントである」（p. 24）とあり、かつ、「この概念〔非飽和名詞〕が「外延」に言及することは基礎的な誤りである」（p. 18）と批判している。ここでは「非飽和名詞」の外延を正しく問題にしているにもかかわらず、西垣内氏は、西山（2003 他）の非飽和名詞の定義にある「外延」を、後で見るように名詞の外延ではなく、名詞句の外延と一貫して誤解している。上の批判はその誤解に基づいたものである。そして、名詞句の外延は、個体ないし個体概念と考えていることが明言されている。しかし、N-意味理論では、筆者の知る限り、名詞句について外延が問題になることは、非飽和性を名詞句レベルに拡張した場合の、非飽和名詞と全く並行的な議論以外にはない。⁵⁾

西垣内氏はこのように N-意味理論の非飽和名詞とそのパラメータという概念を体系的に誤解している。⁶⁾ まともな議論が不可能になるほどの誤解を論文において著名な専門家が書いていることが信じがたい読者のために、西垣内（2024: 2 節「非飽和名詞」の定義）を見ていくことにする。西垣内論争においては、同じ現象（指定文や潜伏疑問文）を、西垣内氏は関数名詞句（西垣内（2016）などでは「中核名詞句」と呼ばれていた）、西山・西川氏は非飽和名詞（句）及び変項名詞句という、似て非なる概念で分析している。各自の議論を展開する中で論争相手の概念に言及することが多いため、自らの枠組みに引き付けてそれに触れることが多く、その場合には意味に歪みが生じやすい。それに対して、西垣内（2024: 2 節）は、西山（2003）の非飽和名詞の定義を前に、読解に専念しており、そのような歪みなく西垣内氏の理解を見ることができる。以下、セクションの全文を引用して、「※」で示す引用者註の形でコメントしていくが、両方を一度に理解するのは非常に認知的付加が高いため、まずは引用者註を飛ばして読み、その後にもう一度引用者註とともに読むことを推奨する（例

5) どの意味機能（後述）の名詞句についても、外延を問題にできないわけではない（西山佑司、p.c.）とのことである。

6) 西垣内（2016c）では、この概念をより詳しく説明してある山泉（2013）も参考文献に挙げられているが、誤解を正すには至らなかったようである。なお、非飽和名詞の概念は西垣内説に登場しないため、“翻訳”が誤りでも、それをもって西垣内説自体が誤りであることにはならないことに注意されたい。

文番号は本稿通してのものに変更、以下同様)。引用中の註は適宜省略するが、省略しない場合は、引用本文に続けて〔 〕内に引用する。

2. 「非飽和名詞」の定義

「非飽和名詞」の定義と言われているものは、言い出せば一語一句についてクレームをつけざるを得ないものである。

- (2) パラメータを含んでいて、その値が具体的に定まらないかぎり、外延を定めることができないタイプの名詞（西山, 2003, 269）⁷⁾※1

まず「パラメータ」という用語が何の説明もなく使われている。この用語は様々な分野で異なった意味で使われているので、何らかの説明、定義が必要である。その「パラメータを含んでいて…名詞」という関係節になっているので、語彙レベルの名詞が句レベルの言語表現である（らしい）パラメータを含むとはどういうことを言っているのか。⁸⁾※2 統語論では「含む」(contain) は「支配する」(dominate) に近い意味で使う〔文献省略〕ので、これが少しでも統語論に関係のある概念であるなら、あり得ない状態を表している。⁹⁾※3

この言明が「(タイプの) 名詞」で終わる関係節（連体修飾構造）であることに

- 7) ※1 西垣内 (2016c: 143) では、「西山 (2003) には「非飽和名詞」の明確な定義が与えられていない。それに近いもの」としてこれが引用されている。
- 8) ※2 「(らしい)」で解釈に確信が持てないことが示されているが、実際、次の統語論的解釈は誤りである。前述の通り、第一義的には意味の話だからである。
- 9) ※3 西垣内 (2023: 40) でも、この定義の「含む」について疑問が呈されている：

いわゆる「非飽和名詞」とされる「好物」のような名詞は語彙レベルの表現なので、「パラメータ」とされるものは必然的にその語の外側に位置して「非飽和名詞」を「飽和」させるものと理解できなくない（それだけに「パラメータを含み」という言い方は不可解である）。

西山 (2003) の定義は意味論の話であって、非飽和名詞の意味に含まれるパラメータが形式的にどう実現されるかは問題にしていない。含むというのも意味構造に変項があるということである。「必然的にその語の外側に位置して」というのは統語構造上の話だが、パラメータの値が話し手・聞き手の間で共有されていれば、表現されないこともある。（その場合に、発音を持たない要素が統語構造に現れるかは寡聞にして知らないが、いずれにせよ N-意味理論で盛んに議論されるようなことではない。）

関連する、もう一つの問題が「(パラメータの値が定まらない限り、) 外延を定めることができないタイプの名詞」における「外延」である。¹⁰⁾※4 これもこの言明が「名詞」で終わる関係節であることから、普通に読めば、問題の「外延」は名詞の「外延」を意味すると解釈せざるを得ない。しかし名詞の「外延」とは何だろう？ たとえば「木」という名詞の「外延」は「木」という記述があてはまる存在物 (entity) の集合である。¹¹⁾※5 ならば、「首都」という名詞の「外延」も「首都」という記述があてはまる存在物の集合 {パリ、ロンドン、東京...} であり、それは「パラメータ」の値が定まるかどうかとは無関係のことである。¹²⁾※6²。[² 名詞句の外延は個体ないし個体概念だが、名詞の外延はその名詞によって記述される存在物の集合である。¹³⁾ ※7 これは意味論の基礎だが、「N-意味理論」では違うのだろうか。¹⁴⁾※8]

ここまでのことで言うと、(2) の「定義」はおとなの文章とは思えないぐらいこ

10) ※4 上述の通り、両陣営の非飽和名詞についての「外延」の理解が決定的に異なる。

11) ※5 ここまでは間違いない。次が決定的に異なる点である。

12) ※6 無関係ではなく、パラメータの値が定まらなると「首都」という名詞の外延が定まらなると西山氏が考えたから非飽和名詞という概念が案出されたのだろう。西垣内氏は非飽和名詞の概念の出発点にある直観を西山氏と共有していないことになる。(しかし、西垣内 (2016a: 105 註6) には「西山 (2003, 34) は「主役」のような非飽和名詞について、その集合を問題にすることはできない」と述べている。」との記述があり、西垣内氏が西山氏の見解を知らなかったわけではない。非飽和名詞が単独で外延を持つかどうかの差は、下で見る、パラメータの働きの誤解につながっている。なお、郡司隆男氏 (西垣内氏の同僚で、同じ時期に指定文・潜伏疑問文を主に形式意味論のアプローチで研究し、相互に論文を参照し合っている) は、「「学生」も、特定の大学に通う人間を指す用法があり、この場合は、大学を指定しないと、その外延は定まらない」(郡司 2016: 19) と、西山氏と同様の立場である。

13) ※7 次の引用にもある通り、名詞句の外延はその指示対象と考えているようである: 「実は「社員」の場合は「会社」が決まってもその外延は決まらない」というのもおかしいのであって、「A 社の社員」の外延を示せと言われれば「A 社の社員」という記述のあてはまる個体 (指示対象) を示せばよいのであり、それはひとりでも二人でも、社員全員であってもかまわない。」(p. 21)

14) ※8 上述の通り、N-意味理論では、名詞句の外延は、指示対象のレベルではあまり問題にしない。

とは足らずなものである。(2) を私なりに翻訳してみよう。¹⁵⁾※9

「パラメータを含んでいて…名詞」について。「パラメータ」をどこに含んでいるのかと言うと、問題になっている名詞（非飽和名詞）の句レベルの投射、すなわち「非飽和名詞」を主要部とする名詞句の中と思われる¹⁶⁾※10³。[³ 西垣内 (2023a) で述べていることだが、「非飽和名詞」を主要部とする名詞句はその投射のなかに「パラメータ」を含むので「飽和名詞句」である。西山・西川 (2018)、西山 (2023) に出てくる「非飽和名詞句」は「食べ物」など「飽和名詞」を主要部とする。「飽和性」を含む要素は「内心性」(endocentricity) の真逆を行く、語彙論、統語論で珍しい存在である。¹⁷⁾※11]「パラメータの値が定まらない限り、外延を定めることができないタイプの名詞」で意図しているのは名詞の外延ではなく、おそらく「非飽和名詞」を含む、それを主要部とする名詞句のことだろうと思われる。¹⁸⁾※12「Xの首都」という名詞句のXの値が決まらなければ「首都」を主要部とする名詞句の外延が「東京」と決まらないということかと思われる。そもそも「日本の首都」の「外延」が「東京」という発想が信じがたいものだが、これについては4.3節で取り上げる。以上の「翻訳」プロセスにより、次のような「翻訳」結果を提案する。

15) ※9 ことば足らずに見えるのは、西垣内氏が読み込みを行った末にたどり着いた理解に照らして定義を見直すと、理解との隔たりが非常に大きいからであろう。次の翻訳は、たどり着いた理解をなるべく素直に表現したものであると考えられる。

16) ※10「思われる」と解釈に確信がないことを示しているが、実際、この解釈は読み込みすぎである。上述の通り、パラメータは第一義的には意味論的な存在であり、統語構造のどこに存在するかについて、少なくとも筆者の知る限り、パラメータの値が言語化されない場合も含んだ一般的な答えはない。しかし、西山 (2003: 269) にあるような「「Xの」というパラメータ」という言い方は、必ず属格名詞句で表されるという誤解を招きかねない (山泉 2010: 2.5.4)。

17) ※11 N-意味理論では、パラメータの値が語用論的に定まっていれば、値の表現が投射の中に言語化されていなくても飽和しているとみなされる。逆に、投射の中にパラメータが変項のまま含まれていたら、飽和していないとみなされる。

18) ※12 ここの、解釈に確信を持ってないことを「思われる」で標示しているが、深刻な誤解である。「パラメータの値が定まらない限り、外延を定めることができないタイプの名詞」で意図されているのは、名詞の外延である。この誤解と、上の首都だけで集合が作れるという西垣内氏の直観は無関係ではないだろう。

- (3) その句レベルでの投射がパラメータを含み、その「[パラメータの] 値が具体的に定まらないかぎり [= なければ]、その句レベルでの投射である名詞句の外延を定めることができないタイプの名詞

自分自身を主要部とする名詞句がパラメータなしでは非飽和となる名詞というものだと考えざるをえない¹⁹⁾※13。これだけの語句を補わなければ意味をなさない言明が20年以上にわたって一定の影響力を持っていることに驚かずにはいられないが²⁰⁾※14、他にも「具体的に」とは、など意味不明な点は多数ある²¹⁾※15。

つまり、西垣内氏は、(2) を (3) のように理解したということで、齟齬は甚大である。以下には、西垣内氏が考える両者の見解の相違が端的に現れている：「[非飽和名詞]」にもとづく考え方では、「日本の首都」の「外延」が「東京」ということで間違いないのだろうか。「関数名詞句」にもとづく考え方では、「首都」は国「日本」と都市「東京」の間の「関係」を表すものである（西垣内 2024: 27）。「日本の首都」の「外延」が「東京」ということで間違いないとはいいい難く、「外延」は厳密には、東京だけが要素の集合「東京」ということになる。²²⁾

筆者は、「外延」についての理解のズレに気付いてようやく、西垣内（2019a: 2 節、2024:

19) ※13 上述の通り、N-意味理論では、非飽和名詞はその意味にパラメータという、定められなければならない非飽和名詞が適切に使えない変項があり、飽和名詞にはパラメータがない。したがって、「パラメータなしで非飽和となる非飽和名詞」は、N-意味理論ではオクシモロンである。

20) ※14 これだけ理解がズレていながら10年近く議論していたことに驚かずにはいられない。

21) ※15 「具体的に」は、パラメータが変数としてあるだけではなく、具体的な値で定まっているということである。西垣内氏は、飽和・非飽和の区別で統語構造において特定の位置を占める構成素が何であれ有るか無いかを問題にしているのに対して、N-意味理論では、レキシコンのレベルで非飽和名詞それぞれにパラメータが変数としてあり、それが具体的な値で定まるかどうかを飽和・非飽和の区別で問題にしているのである（後述の飽和名詞を主要部とする非飽和名詞句は除く）。

22) 素朴な疑問だが、西垣内氏の「首都」が「関係」を表すという考えでは、我々が普通に考える首都と存在論的範疇が異なってしまうのだろうか。関係とは抽象的なものである。しかし、国会議事堂や東京タワーは、抽象的な存在の上にあるのではない。（関連する議論が Langacker 1985: 120 にある。）非飽和名詞の場合、関係は非飽和名詞とパラメータとの間にあるため、この点では問題ない。

3節) が繰り返している、非飽和名詞の定義に関する必要条件・十分条件の議論がだいぶ理解可能になった。まずはその議論を紹介する。西垣内 (2019a: 39) でも、西山 (2003: 33) にある定義を次のように [] で補って解釈していて、ここでも「外延」は名詞句の指示対象と誤解されている。

- (4) 「X の」というパラメータの値が定まらないかぎり [= なければ]、それ単独では [その句レベル投射である名詞句の] 外延 (extension) を定めることができず、意味的に充足していない名詞

もう一つの補い “[= なければ]” が必要条件と関わる部分で、「[~ないかぎり]」が「~なければ」という意味であれば、いわゆる「パラメータ」の値が定まることが句レベル投射である名詞句の外延が定まることの「必要条件」となる」と述べている。おそらく大多数の読者がこの議論を理解していないと思われる。筆者の理解では、これはどういうことかと言うと、P: パラメータが決まる、E: 外延が決まる、とすると、上の定義は、「~ないかぎり」を「~なければ」とすれば、 $[\neg P \rightarrow \neg E]$ となる。これと真理条件的に等価の対偶は $[E \rightarrow P]$ となる。 $[E \rightarrow P]$ において、E は十分条件、P は必要条件となるわけである。こう考えると、「監督」と「選手」はどちらも「非飽和名詞」ということになる。なぜなら、いずれも次の推論に沿い、現象としても、修飾表現なしで職業名として使うことができないからである (西垣内 2019a: 40)。

- (5) a. $\neg [P: \text{「侍ジャパンの監督」}]$ (パラメータが決まらない)
 $\rightarrow \neg [E: \text{「稲葉篤紀」}]$ (外延が決まらない) ($\neg P \rightarrow \neg E$)
 b. $\neg [P: \text{「侍ジャパンの選手」}]$ (パラメータが決まらない)
 $\rightarrow \neg [E: \text{「筒香嘉智」}]$ (外延が決まらない) ($\neg P \rightarrow \neg E$)

外延を指示対象ではなく潜在的指示対象の集合と考えれば、N-意味理論でもここまでは問題ない。しかし、「監督」と「選手」では、指定文とカキ料理構文において振る舞いが異なると西垣内 (2019a: 40) は指摘する。

- (6) a. 稲葉篤紀が侍ジャパンの監督だ。(指定文)
 b. 侍ジャパンは稲葉篤紀が監督だ。(カキ料理構文)

(7) a. 筒香嘉智が侍ジャパンの選手だ。(*指定文、「総記」のコピュラ文)²³⁾

b. *侍ジャパンは筒香嘉智が選手だ。(*カキ料理構文)

西垣内はこの差を重視する。非飽和名詞を上のように必要条件に基づいて定義する ($[E \rightarrow P]$) と上の差が扱えないので、「非飽和名詞」の定義において、パラメータが決まるのが外延が決まることの「十分条件」($P \rightarrow E$) とすることを改善案として出している。こうすると、以下のように「監督」は問題ないのに対して、「選手」は弾かれるからである。

(8) a. [P:「侍ジャパンの監督」] (パラメータが決まる)

→ [E:「稲葉篤紀」] (外延が決まる) ($P \rightarrow E$)

b. [P:「侍ジャパンの選手」] (パラメータが決まる)

→ [E:「??」] (外延が決まらない) ($P \rightarrow E$)

もちろんこの「外延」は、N-意味理論における潜在的指示対象の集合ではなく、「侍ジャパンの選手」という名詞句が使われたときの指示対象（たとえば筒香選手）の謂であることは、次の記述から確認できる：「「選手」のパラメータが決まってもそれを十分条件として句レベル投射の外延を決めることができない。筒香選手以外にも該当者が複数いるからである」(p. 41)。²⁴⁾

当然ながら、パラメータが決まって記述を満たすようになる個体が1つだけであれば、上のテストはパスする。おそらくこのことから、西山 (2023: 8) は、「関数名詞とは、値が唯一に定まる非飽和名詞である」と解釈した。しかし、西垣内 (2024: 18) は、この解釈を、次のように激しく批判している。「批判の対象となる論文の中心的概念を、このように無意味な表現で歪曲する言明が『日本語文法』の査読の中で是認されていることに驚かざるを得ない。「値が唯一に定まる」はまったく意味不明だ」。筆者の推測では、西山 (2023: 8) の「値が唯一に定まる」とは、上の「監督」や、西垣内 (2019a: 42-43 他) で述べられている、

23) 西山 (2023: 7) は、(7a) を適格な指定文と判断するが、西垣内 (2019a) では、(*指定文、「総記」のコピュラ文) となっているから、これは適格な指定文ではなく適格な「総記」のコピュラ文ということである。「総記」のコピュラ文は、N-意味理論にはないコピュラ文のカテゴリーであることに注意が必要である。

24) 西垣内 (2024: 21) は、西山 (2023: 註 5) が、「選手」を非飽和名詞と考えているかどうかが不明であるとして、次の二者択一を迫っている。

1. 適切なパラメータを設定すれば「選手」は「非飽和名詞」である。

→ 適切なパラメータを示すこと。パラメータの「適切」さについての一般的な説明も必要。

2. 適切なパラメータが設定できないので「選手」は「非飽和名詞」ではない。

→ 「非飽和名詞」の定義を根本的に改訂するか、この概念を放棄するかを選択。

なお、筆者の考えでは、氏家・田中 (2024) の認知言語学的な路線が有望と思われる。

Max 演算子（「Sharvit (1999) などで用いられている、唯一性または最大値を表す演算子」（p. 43）、(1) 参照）についての議論を承けてのものだろう。²⁵⁾しかし、西垣内説では、「日本の首都」の段階では集合に対応し、その集合の要素が1つである必要はないため、「値が唯一に定まる」とは限らない、ということであろうと以下の西垣内（2020）の記述から推測できる。

(9) 東京が日本の首都だ。

本論文では、「首都」を国（名）と都市（名）の「関係」を表す2項述語であると考える。「日本の首都」は次のような、集合の表示で表されるものである。

$\{x \mid \text{首都}(\text{日本}, x)\}$

この表示は、「日本」と「首都」という関係を持つものの集合を表しており、この集合における「変項」xの「値」を「東京」とするのが[(9)]の意味だということになる。(p. 38)

もう一点、西山（2003 他）と西垣内氏の間で非飽和性について見解が異なっている点がある。名詞の「(非) 飽和性」がレキシコンに記載される語彙的な素性か否かについて、西山（2003: 270）は語彙的な素性と考えている。西垣内（2016c）は、見解の相違に自覚的でありつつ、異論を提示している。西山（2003: 261）が「指定文」とする(10) aは、これ自体は問題ないが、「この病院」を主題化してカキ料理構文（西山 1990）にすると、通常、不自然になる。

(10) a. 花子が、この病院の {看護師 / 医師} だ。

b. ?この病院は、花子が {看護師 / 医師} だ。

このことを、西垣内（2016c: 158）は、通常病院には複数の看護師／医師がいるため、「花子」

25) この演算子の働きの具体例として、西垣内（2019a: 43）では以下が対比されている。

(i) $\text{Max}(\lambda x. \llbracket \text{監督} \rrbracket(\llbracket \text{侍ジャパン} \rrbracket, x)) = \llbracket \text{稲葉篤紀} \rrbracket$

(ii) $\text{Max}(\lambda x. \llbracket \text{選手} \rrbracket(\llbracket \text{侍ジャパン} \rrbracket, x)) = ??$

そして、次のように解説されている：「『侍ジャパン』と『監督』という関係を持つ個体の集合の中で唯一最大の値として『稲葉篤紀』を得ることができるが、『侍ジャパン』と『選手』という関係を持つ個体の集合の中で唯一最大の値を求めることはできない」。ここで関与的なのは、侍ジャパンの監督は唯一人だが選手はそうではない、という唯一か否かという点であるようだ。しかし、筆者が理解した限りでは、少なくともMax演算子の標準的な定義に従えば、(ii)の右辺には、侍ジャパンの選手全員のメレオロジカルな和ないし全員から成る集合、つまり『侍ジャパンの選手』が得られるはずである。

は、「この病院の [看護師 / 医師]」を過不足なく指定するということがなく、後述の「過不足なく指定」の要件が満たされないから、そもそも (10) a は「通常状況では「指定文」ではない」と分析している（「過不足なく指定」については、別稿で詳細に論じる。現時点では理解できなくても問題ない）。一方、病院には看護師、医師が複数いるという通常状況が成り立たず、この病院に看護師 / 医師が 1 人だけであることを話し手も聞き手も共通理解として知っている場合には、「花子」が「この病院の看護師 / 医師」を過不足なく指定するため、(10) a は指定文であり、b も自然なカキ料理構文になるとする（pp. 159-160）。ここから西垣内は、以下のように述べている。

「看護師」が「非飽和名詞」であるかどうかはその文脈に依存するのである。本論文の分析では、「非飽和性」というアトミックな特性があるのではなく、「内項が N の意味内容を（過不足なく）構成する」名詞句の構造の主要部になることができるか、もちいられる文脈に照らしてその名詞が [図 1] の主要部となれるかが「非飽和性」を決定する要因となる。（p. 160）

西垣内（2024 「非飽和性」の不合理）を書いた西垣内氏は、もはや、「非飽和名詞」「非飽和性」という用語を使わないとしても、非飽和性が文脈—前後の言語表現ではなく、病院に看護師／医師が何人いるかを話し手・聞き手が知っているかどうかといった非言語的文脈のことと理解してよいだろう—に依存すると考えている点は、西山（2003）の見解とは異なり、注目に値する。西山・西川（2018）は、句のレベルで規定される非飽和性も認める立場ではあるが²⁶⁾、この病院に看護師 / 医師が 1 人だけであることを話し手も聞き手も共通理解として知っているといった、（非言語的）コンテキストに照らして飽和・非飽和が決まるとは考えていないのである。

2.3. 小括

以上、西垣内（2024 他）の非飽和名詞とそのパラメータという概念の理解に西山（2003 他）のそれとどのように齟齬があるのかを述べた。生成文法の大家と目されている研究者同士が

26) 西山・西川（2018）の非飽和名詞句（例「いちばん好きな食べ物」（p. 183））については、西垣内（2016b: 5.3）で、議論の詳細は省略するが、次の容認性の差を主な根拠として、「西山（1990）で言及されている、「好んで読む本」が「非飽和名詞句」として働くという可能性を否定」していて、「非飽和名詞句」というものが存在しない」と主張している。

(i) a. そ（いつ）の著書が [ほとんどの教授]_i の愛読書だ。

b. ?* そ_i（いつ）の著書が [ほとんどの教授]_i が好んで読む本だ。

しかし、筆者には、上の b が a に比べて容認度が落ちるとは感じられない。

専門分野の議論においてこれほど大きなすれ違いをしていることに驚かれた読者は少なくないと思うが、専門家だからこそ大きな誤解をしたのだと筆者は考える。つまり、統語論の専門家であったり、「外延」という用語に馴染みがあったりしたことから、西山氏の意図しなかった解釈が容易になっていたのである。関連性理論によれば、言語表現は聞き手による様々な解釈の可能性が開かれていて、聞き手にとって関連性の高い解釈（厳密には、最適な関連性のある解釈）が選ばれる。聞き手の豊富な背景的知識と密接に絡まる解釈は、たどり着くのが容易であり、聞き手が容易にたどり着ける解釈は、その分だけ関連性が高くなり、選ばれやすいのである。西垣内（2024: 29）は、次のように回顧している：「西垣内（2016 [c]）の注5には「パラメータ」が「関数名詞句」（同論文では「中核名詞句」）の外項に相当するという旨の記述がある。その当時は「非飽和名詞」の問題点は認識しつつも「合理化」するかたちで誤解していたところからの誤りと認めなければならない。」。学術的著作が合理的なことを言っていると想定して解釈することは普通のことである。しかし、学術的著作が読者と同じ視座・枠組みから合理的なことを言っているとは限らない。これは誤解された側が誤解に基づいた反論を解釈する際にも当てはまることである。西山・西川（2018）や西山（2023）が書かれる前から、西垣内氏の誤解は端々に現れていたにも関わらず、これほどまでに誤解されていることは気付かれていなかったようである。この2つの文献では誤解が指摘されておらず、上述のように、食い違いに気付いていないことを示唆する箇所もある。誤解がうかがえる記述は、合理化されて解釈されていたのかもいれない。

本節で取り上げた事例では、両陣営の間で、統語論と意味論の比重が違うことがすれ違いの大きな原因の一つになっていた。類比的なすれ違いは、他の立場の違いでも起こり得る。現に筆者は、言語の意味の背景にある概念化に着目する認知言語学と、言語的意味に着目するN-意味理論の間でも、同種の誤解がしばしば起こりそうになっているのを、西山氏が主催する慶應意味論・語用論研究会でしばしば目にする。つまり、認知言語学者が言語と独立した概念化の話をしているのを、N-意味理論研究者が言語の意味の話と受け取りそうになっているということである（もちろん、逆の誤解が起こる可能性もあるだろう）。以上、本節では、自分にとって馴染みのある枠組みによって合理化するかたちでの誤解が、論争において大きな障害となり得ることを示した。

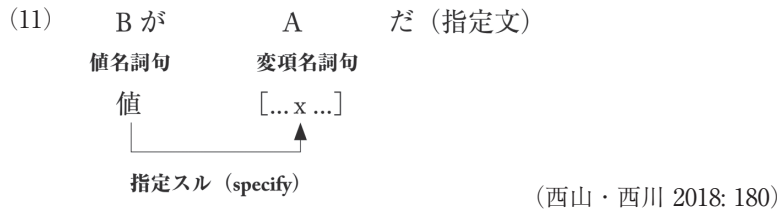
3. 変項名詞句をめぐる議論

本節では、N-意味理論の最重要概念（西山 2013: 331）である変項名詞句をめぐる、西西論争の議論を検討していく。それを通して、両陣営がどちらも生成文法論者であるにも関わらず、立場にかなりの隔たりがあり、それが生産的な議論を難しくしていることを示す。

変項名詞句とは、名詞句が文中で果たす意味機能（後述）の1つを果たしている名詞句で、

それが「A」という形式であれば、「x が A だ」と表せる命題関数（後述）を表示するものである。指定文の指定される方の名詞句や潜伏疑問名詞句は変項名詞句とされる。N-意味理論では、この概念を用いて、指定文を次のように分析する。

西山（2003）によれば、指定文「B が A だ」において、A は命題関数を表す変項名詞句、B はその命題関数の変項を埋める値を表す表現であり、文全体は、(11) のように、A に含まれる変項の値を B でもって指定するという関係にある、とされる。



[...x...] は命題関数を表している。命題関数とは、変項を埋めると命題が出力される関数で、たとえば、(9)（東京が日本の首都だ）では、「日本の首都」は命題関数 [x ガ日本の首都ナリ] を表している（カタカナや文語のナリが使われているのはメタ言語であることを強調しているのだと思われる）。この x に東京を入れれば、「東京ガ日本の首都ナリ」という命題が出力される（変項名詞句の概念に対する批判は、山泉 2022、in prepなどを参照）。

以下ではまず、西垣内（2016bc, 2017）に見られる変項名詞句の理解を確認し、その後、西垣内（2018、2023ab）による批判を検討する。

3.1. 文中における意味機能という観点の不在

一連の研究の初期の論文である西垣内（2016b）の冒頭で変項名詞句が触れられている。そこでの言及のされ方から、N-意味理論の元概念とは大きく異なった理解がされていることが既に明らかである。そこでは、「変項名詞句」とは、次のような表現である」と、「洋子の趣味」「タカシの身長」「奈緒美のケータイ番号」「ビールの量」という名詞句だけが挙げられている。このような「変項名詞句」の導入の仕方は、西垣内（2016c、2017）にも見られる。しかし、これらは変項名詞句であるとは言えない。ある名詞句が変項名詞句かどうかは、名詞句が文中になれば判断できないからである。²⁷⁾なぜなら、変項名詞句とは、文中における名詞句の意味機能というレベルにおいて、特定の意味機能を持った名詞句のこ

27) 特定の名詞が名詞句主要部であるとき、その名詞の語彙の意味からして本来的に変項名詞句を構築する、ということがN-意味理論で言われることがあるが、筆者の考えではこの見解はN-意味理論の中でさえ維持できない。

とだからである。

名詞句の意味機能というレベルの必要性は、西山（2003）を通して主張され、西山（2023: 17）の最後でも「この議論を通して、潜伏疑問と指定文の現象を解明するためには、「名詞句が文中で果たす意味機能」という視点が重要であること、名詞固有の意味特性に依拠する「関数名詞」説にはこの視点が欠けていること、を明らかにした。」と強調されている。しかし、西垣内諸論文では、筆者の見る限り、変項名詞句という概念については何度も批判的に論じられているにも関わらず、N-意味理論にとって根本的な、文中における名詞句の意味機能というレベルについては、一度も言及されておらず、上の西山の主張に対する応答もない。もっとも、意味機能というレベルの必要性について批判している文献は、筆者の知る限りでは、筆者の準備している山泉（in prep）だけである。

3.2. 変項名詞句の非指示性について

変項名詞句は非指示的で、指示対象を持たない。述語－項構造の項の側ではなく、「論理的には1項述語」（西山 2003: 76）「意味論的には1項述語」（p. 132）であると言われる。この点が伝わっていないことを示唆する記述が西垣内（2016c）に見られる。まず、「[変項名詞句]は（その主要部が）「1項述語」と言われており、われわれの分析での「中核名詞句」が2つの項を含むと考えている点でも根本的に異なっている」（註8）と述べられていることから、意味論的側面が強調されている変項名詞句を中核名詞句（関数名詞句）のように統語構造に位置付けて理解しようとしていることが伺える。ここでも非飽和名詞（句）と同様の、統語論にバイアスがかかった理解がされているのである。N-意味理論において、「（その主要部が）」という補足は目にしたことがないし、1項述語であるとみなされるのは主要部ではなく名詞句全体である。また、変項名詞句が統語構造において変項名詞句独自の項を取るかどうかという話もされない。後述するように、それこそが問題だと西垣内氏は応答するだろうが、変項名詞句とはそういうものである。

ところで、倒置指定文の関数名詞句は、非指示的とされているのだろうか。西垣内（2016c）の以下の記述を見ると、どちらとも判断できない。

この分析は、注8で言及している、西山（2003）などによって指摘されてきた、倒置指定文〔(12)〕の主語が非指示的であるという意味的な直感に対して統語的な根拠を与えるものである。倒置指定文の主語には移動によって作られた変項が含まれている。

(12) [NP 日本の [N' x [N 首都]]] は東京 x だ。

変項がとる値によって、それを含む名詞句の指示対象が変わるということが問題の名詞句の非指示的性質を統語構造の面から説明する。（p. 145、下線は引用者）

「それを含む名詞句」とは、「日本の首都」のことであり、N-意味理論はこのような倒置指定文の主語を変項名詞句と分析する。変項名詞句であれば、指示対象はないはずである。上の下線部の趣旨としては、変項がとる値が東京 x だったら、変項 x を含む名詞句「日本の首都」の指示対象が東京になる、というようなことを言いたいのだと思うが、そうすると、その文は「東京は東京だ」と同じ意味になってしまわないだろうか（N-意味理論の分析ではそのようなことにはならない）。

変項名詞句が非指示的である点は、西垣内（2024）に、「指定文」を成立されるものは「変項名詞句」という、「非指示的」であることが強調されるもの」（p. 22）とあるので、少なくとも字面の上では西垣内氏に伝わっているようである。しかし、「意味論の入門書にはたいてい書かれていることだが、2つの語彙項目が「外延」で関連付けられる場合、それらは内包的環境（intensional context）以外では交換が可能（exchangeable）なはずである」（p. 23）と述べてから次の議論をしているところを見ると、本当に伝わっているのか大いに疑わしい。

西山（2003, 269-271）には「非飽和名詞」のリストがありその中には「原因」「結果」なども含まれている。

- (13) a. タバコの火がゆうべの火事の原因だ。
b. ゆうべの火事はタバコの火が原因だ。

「火事の原因」の外延が「タバコの火」というような考えが、意味論的に支持されるのだろうか。交換可能性のテストの結果は明らかである。

- (14) ゆうべの火事の原因が判明した。≠タバコの火が判明した。

「指定文」の焦点要素²⁸⁾についてその外延を問うことが誤りであることは、西山（2003）に10回以上言及されている Higgins（1973, 127）が次の推論が成立しないことによって強調している重要なポイントである。²⁹⁾

- (15) This car's main defect is its steering.
This car's steering is loose.

28) 「東京が日本の首都だ。」なら「東京」が焦点要素にあたる（西垣内 2024: 21）。

29) 「指定文」の焦点要素についてその外延を問うことが誤りである」ということは、Higgins（1979）がこの例を挙げて述べていることではない（西山佑司, p.c.）。そのポイントは、(main) defect, attraction, beauty, trouble (with) のような表現は、表現自体の意味によって、This car's main defect is its steering. のような（倒置）指定文の主語の主要部になることは可能でも、this car's main defect is loose. のような指定文の主語の主要部になることは不可能（あるいは極めて難しい）ということである。そもそも、「指定文」の焦点要素についてその外延を問うことが（関連性がないという意味ではなく不可能であるという意味で）誤りであるということが疑わしく、Higgins がこの主張をしているという証拠も筆者には見当たらなかった。

*Therefore, this car's main defect is loose. (p. 23)

非飽和名詞が主要部である名詞句が変項名詞句になった場合、名詞句は非指示的であるから指示対象はないため、上のような交換は不可能である。語彙項目のレベルではなく文中の名詞句の意味機能のレベルを考慮に入れないと、交換可能かはわからないのである。上の例では、(13) a・(14) の「ゆうべの家事の原因」と、(15) 1文目の *This car's main defect* は変項名詞句で、上のように置き換えられないことを N-意味理論は予測する。実際に、このような置き換えの結果がおかしなことになる、ということは、西山 (2003) のお気に入りの議論で、変項名詞句の非指示性を示すために、何度も提示されている (pp. 76-77, p. 82, p. 83, p. 133, p. 139)。その議論に対して、筆者には批判があるがここでは深入りしない。

3.3. 変項名詞句説への西垣内 (2018, 2023ab) の批判

以上のように、西垣内諸論文に見られる変項名詞句の理解は不十分であるが、変項名詞句による分析に対して、西垣内諸論文は興味深い批判を繰り返している。それがどのような批判で、なぜ批判に対して西垣内氏が期待するような回答がないのかを議論する。西垣内 (2018: 166) は、上で見たような誤解があるため無理もないことだが、「そもそも「変項名詞句」というものがどのような性質というか素性 (すじょう) を持つものがわからない (統語構造でないことははっきりしているし、意味論の表示とも無縁である)」と述べている。西垣内説では、関数名詞句の内項の移動によって指定文が派生される、と統語論に立脚した指定文の理解をしていることを思い出そう。N-意味理論の変項名詞句による指定文の分析 (11) は、名詞句の意味機能という別のレベルを中心としたものであり、この説は、西垣内説とはあまりに異質であるため、上のような所感を抱くのは不思議なことではない。もちろん、変項名詞句は、全体の統語構造としては、NP であるということは明確だが、これが西垣内氏の求める答えでないのは明らかである。また、西垣内氏は、関数名詞句の主要部名詞の働きの意味論的表示として、(1) $(\text{Max} (\lambda x.P (\llbracket a \rrbracket, x)) = \llbracket \beta \rrbracket)$ を提示していることから、意味論の表示としては、このような形式意味論の式を想定していると考えられる。したがって、変項名詞句の表示する命題関数と値名詞句の表す値との間の意味的緊張関係を表した (11) を見ても、「意味論の表示とも無縁である」と考えるのは十分あり得ることである (もちろん、N-意味理論側からは反論があるだろう)。

変項名詞句を用いた潜伏疑問文の分析に対する西垣内 (2020: 60) の批判を検討しよう。

- (16) (文脈: 「文学の授業で、配付資料にいくつかの文学作品からの抜粋が並んでおり、それぞれそれを書いた作家の名前は示されていないとしよう。」 p. 60)

- a. タカシは誰が『門』を書いた作家かわかった。
- b. タカシは『門』を書いた作家がわかった。

西垣内（2020: 60）は、潜伏疑問文の b は、「タカシがわかったのは夏目漱石が『門』を書いた作家だという「指定文」の解釈」しかないのに対して、潜伏疑問文ではなく間接疑問節の a は、指定文の解釈だけでなく、「「この作者 {は / が} この作者だ！」という風に」、「その文体の類似性から、『虞美人草』を書いた作家が『門』の作者と同一人物だ」とタカシがわかったという解釈もあることを指摘する（この解釈では、「タカシは『門』を書いた作家が夏目漱石であることを知っている必要もない」とされる）。この解釈は、「想定される答えが「これ（＝『虞美人草』）の作者がこれ（＝『門』）の作者だ」（p. 60、下線は原文、次も同様）の場合は同定を表す文の解釈、想定される答えが「「これ（＝『虞美人草』）の作者はこれ（＝『門』）の作者だ」」の場合は同一性を表す文の解釈とされる（もっとも、同定を表す文・同一性文を表す文の定義はない）。そして、このような差があることから、「西山（2003: 78-86）による考察は、「潜伏疑問」である「『門』を書いた作家」を「変項名詞句」という、「命題関数」と言うが実態は束縛されない変項を含むコピュラ文「x が『門』を書いた作家だ。」に言い換える、つまり意味の限定された「潜伏疑問」を多義性のあるコピュラ文に言い換えるものであることがわかる。」（p. 60、太字は原文）とどうやら批判している。

しかし、西山（2003）では、まさに言及されている範囲において、「潜伏疑問文とコピュラ文との密接な意味関係」（p. 83）について触れられていて、変項名詞句の表す命題関数「[x が A デアル] は指定コピュラ文構造を有している」（p. 84）と主張されている。「命題関数」と言うが実態は束縛されない変項を含むコピュラ文」と西垣内（2020: 60）がいうものは、カタカナ表記が示唆するように、曖昧性のある自然言語のコピュラ文ではなく、脱曖昧化したメタ言語なのである。したがって、「つまり意味の限定された「潜伏疑問」を多義性のあるコピュラ文に言い換えるもの」（p. 60）であるわけではない（もちろん、この自然言語の指定文に依存したメタ言語とは独立に、指定文の意味が規定されている必要はある）。

変項名詞句を用いた指定文の分析に対して、西垣内（2023b）は次のように批判している。

西山（2003）によれば、[(9) 東京が日本の首都だ。] が「指定文」であるという直感があれば、「x が日本の首都だ」という「命題関数」（西山 2003: 73 etc.）（というが、実体は束縛されない変項を含むコピュラ文に「指定スル」という矢印のついたもの）に関連づけられることで説明したことになるようである。西垣内（2023 [a]: 5 節）に関連する議論がある。（p. 38）

「説明したことになるようである」と述べる西垣内氏が考える真の説明とはどのようなものか？ 西垣内（2023a: 5 節「変項名詞句」の問題）を検討しよう。

西山・西川（2018）は「指定文について、西垣内（2016 [c]）の〔関数名詞句〕による分析に対比されるものは、西山（2003）の変項名詞句による分析である。」（西山・西川, 2018, 180）、「指定文の分析において不可欠なのは、〔関数名詞句〕ではなく、変項名詞句という概念装置である。」（西山・西川, 2018, 191）としている。

「対比」ということで西山・西川（2018）がどのようなイメージを表そうとしているのか不明だが、少なくとも「変項名詞句という概念装置」が「関数名詞句」と比較されるものではない。[引用者註 西山・西川（2018）の意図を推測するなら、一つには、非飽和名詞（句）ではなく変項名詞句と関数名詞句を対比するべきだということだろう。西山・西川（2018）のそこまで論じられているのは非飽和名詞（句）であり、また、西垣内（2016c）でも変項名詞句より非飽和名詞（句）が大きく取り上げられていたからである。もう一つには、指定文は、西垣内説では関数名詞句という統語論の概念装置で規定される一方、N-意味理論では、変項名詞句という名詞句の意味機能というレベルの概念装置で（その統語構造はどうであれ）規定されるということだろう。]「関数名詞句」（西垣内（2016 [c]）では「中核名詞句」と呼んだ）は西垣内（2016 [c], 2.2 節）で示している統語構造および意味との対応関係にもとづく制約があるものである。

「変項名詞句」には、どのような制約があり、どのようにしてその形式とはたらきを検証できるのだろう。端的に言って、「変項名詞句」は、制約も検証する方法もない、ある文が「指定文」であると（主観的に）判断されれば、次のような定式化（西山・西川, 2018, 180, (10)）に当てはめられるという「概念装置」である。

- (11) B が A だ（指定文）
 値名詞句 変項名詞句
 値 [... x ...]
 └──────────┐
 指定スル (specify)

この考察に制約も検証も意識されていないことは、西山・西川（2018, 180, 注 6）で、査読者のひとりが何を指定文と見なすかについて疑問を呈していることについて次の

ように応えていることによって端的に示される。³⁰⁾

われわれの考える指定文「BがAだ」の基本的な意味構造は〔(11)〕であり、…〔(9) 東京が日本の首都だ。〕ばかりでなく〔(i) a. これが花子の首飾りだ。b. あの男がコレラ患者の兵士だ。〕も〔(18)〕の具体例にはかならない。仮に、西垣内(2016〔c〕)が〔(9)〕のケースのみを指定文と呼ぶとするならば、それは〔(9)〕〔(i) ab)〕の間の共通の意味構造〔(11)〕を捉え損なうであろう。

「指定文「BがAだ」の基本的な意味構造は〔(11)〕であり」では、査読者の「何を指定文と見なすか」、何をもって「BがAだ」が指定文と呼べるのかという問いに答えていない。³¹⁾〔(11)〕に当てはまるものが「指定文」だ、では答えにならないのは誰にでもわかることである。問題は「〔(9)〕〔(i) ab)〕の間の共通の意味構造〔(11)〕を捉え損なう」—〔(11)〕を「意味構造」と呼ぶことに大きな疑問があるが—で、西垣内(2023a)が指定文とみなす〔(9)〕と西垣内(2023a)が指定文とみなさない〔(i) ab)〕がともに〔(11)〕に当てはめようと思えば当てはまる（まさにそこがより深刻な問題である）という「共通性」があるとしても、その共通性が「指定文」とあるところにつながっていくことを保証するものが何もないということである。(pp. 39-40、下線は引用者)

言うまでもなく、変項名詞句に何の制約もないわけではない。たとえば、「次郎が太郎の父親だ。」の変項名詞句「太郎の父親」が表示するとされる命題関数は、〔x ガ太郎の父親ナリ〕であって、〔x ガ三郎の父親ナリ〕や〔x ガ太郎の母親ナリ〕にはならない。

もちろん、このようなものが西垣内氏の求める制約ではなく、西垣内氏は、変項名詞句説に対して、変項名詞句の統語構造はどのようなもので、それが変項名詞句の意味とどのように対応するか、特に変項の由来と統語的対応物は何かを問うている。西垣内(2016c)で、「変項名詞句」がどのような形で「変項」を含むのか、統語構造との関係は不明である」(p. 145)と批判をしてから、一貫してこの点を問題視しているのである。「どのような形で「変項」を含むのか」という問いに対しては、「命題関数の変項として」というのが、N-意味理論からの回答ということになるが、もちろんこれは、西垣内氏が納得するものではないだろ

30) 原文を見たところ、⁶⁾ 査読者のひとり、何を指定文とみなすかについて西垣内(2016)とわれわれの間に齟齬があり、西垣内(2016)が考える「指定文」をわれわれの考える「指定文」の下位タイプと見なす可能性を指摘した。」とあるが、疑問を呈してはいなかった。

31) 原文を見たところ、このような問いもなかった。

う。西垣内氏はあくまで統語論に根ざして、変項名詞句はどのような統語構造で、その中にどのような形で「変項」が含まれるのかを問うているからである。

3.4. インターフェイスの斉一性と統語論中心主義

たしかに、N-意味理論は、変項名詞句などの統語論を数十年間棚上げしたまま、主に意味論（次いで語用論）を議論している。「[名詞句が文中で果たす意味機能]という視点から、指定文や潜伏疑問文の意味構造を解明しようとしている」（西山 2003: 16、下線は引用者）と言っている通りである。おそらく統語論は、基本的に主流派生成文法に則っていて、N-意味理論の知見に従って改造が必要な部分があったら、誰かが構築してくれるのを待っているのだろう。このようなことは、N-意味理論に限った研究方略ではなく、筆者も指示参照ファイル理論（山泉 2022 他）では統語論を棚上げにしている。N-意味理論が意味論的議論に集中している間は、西垣内（2024: 21）の「いつもの通り、「指定文」の定義も基準も示さず、「筆者の判断」を脚注の中で述べている」というような批判が止むことはないだろう。

しかし、N-意味理論を支持する統語論者が変項名詞句、及びそれを含む節の統語構造を示したとしても、それが西垣内氏の納得するものである保証は無い。ここから先は、仮想の話になってしまうが、論争のあり得るすれ違い方の1つを検討していきたい。まず、採用する統語理論が、西垣内（2016c, 2018 他）の採用するもののように、統語的範疇として焦点投射、「評価」投射、「証拠性」投射、Finite Phrase、Topic Phrase、Force Phraseなどを設けるとは限らない。そのような技術的細部の違いよりも重要なのは、意味論的に存在する変項の対応物が統語論において設けられるとは限らないということである。これは、インターフェイスの斉一性—統語論と意味論のインターフェイスは、意味が統語構造に透明に写像される（maps transparently）という意味で最大限単純であり、最大限一様でもある結果、同じ意味は常に同じ統語構造（もちろん、表層的な構造に限らず Logical Form などでもよい）に写像される（Culicover and Jackendoff 2005: 6）³²⁾—を想定するかどうかによる。インターフェイスの斉一性は、「最大限」という部分が重要で、これがない弱い斉一性はどの文法理論でも多かれ少なかれ想定していると考えられる（想定しなければ、意味構造と統語構造の間の写像が全く不規則ということになってしまう）。

西垣内説は、インターフェイスの斉一性を想定していると考えられる。上記の様々な投射を設けていること、移動で統語的空所ができると意味論的変項ができると主張していることからだけでなく、Nishigauchi（2011）で、wh 疑問の答えなどの断片（fragment）を、完全

32) “Interface uniformity: The syntax-semantics interface is maximally simple, in that meaning maps transparently into syntactic structure; and it is maximally uniform, so that the same meaning always maps onto the same syntactic structure.” (Culicover and Jackendoff 2005: 6)

な文からの削除によって派生していることがそれを強く示唆する（詳細は Culicover and Jackendoff 2005: 234）。一方、N-意味理論と対になる統語論は、西垣内説と同様に強いインターフェイスの斉一性を想定しているとは限らない。確かに N-意味理論研究者は、筆者の知る限り、主流派生成文法との統合を志向しているので、現状において N-意味理論が想定する統語論も、西垣内説と同様に強いインターフェイスの斉一性を想定していると考えることには妥当性がある。しかし、N-意味理論の提唱する意味機能の違いを文－文法においてどのように捉えるかという、大きな未解決問題が N-意味理論にはあり、問題の解決策如何によっては、インターフェイスの強い斉一性が放棄されるかもしれない。その場合には、変項名詞句の統語構造および意味との対応関係が N-意味理論側から示されても、西垣内氏の反応は、現状とさして変わらないということにもなり得る。

インターフェイスの斉一性と密接に結びついているのが統語論中心主義 (syntacticocentrism) である (Culicover and Jackendoff 2005: 56)。それによると、要素を組み合わせる複合的な構造を生成できるのは統語論だけであり、音韻論や意味論にはそのような力がなく、統語論で作られた構造を解釈するだけである。すると、指定文の変項は、統語論で作らなければならない。主流派生成文法の系譜に連なる西垣内説はインターフェイスの斉一性だけでなく、統語論中心主義も受け入れていると考えられるが、指定文の変項は前述の通り、焦点要素の移動によって作られる (西垣内 2016c: 145)。そのため、N-意味理論の変項名詞句のように、意味論のレベルでいきなり変項が現れても、素性 (すじょう) も出自も不明であるように統語論中心主義の視座からは見えるのだろう。

インターフェイスの斉一性も統語論中心主義も認めない立場に立つ指定文の分析の 1 つの可能性は次のようなものである。各種コピュラ文 (指定文、措定文、同定文等) は、統語構造によっては区別されず、統語構造に C-I インターフェイスで結ばれている概念構造でのみ区別される。概念構造に変項があっても、統語構造にその対応物が存在する必要はなく、たとえば変項名詞句の「日本の首都」(例「東京が日本の首都だ」) とそうでない「日本の首都」(例「日本の首都が大地震の被害に遭った」) は、特段の統語的根拠がなければ統語的に同一である。³³⁾ この場合、西垣内 (2023a) の「何を指定文と見なすか」、「何をもって「B

33) 西垣内 (2016c 他) で議論されている逆行束縛、及びそれを含む連結性 (connectivity) は、統語的根拠とされることがあるものの、統語論中心主義を取らない文法理論では、連結性を統語論以外で扱っている (Culicover and Jackendoff 2005: 7.4)。形式意味論で統語的変形を用いずに連結性を扱うアプローチもある (Jacobson 1994)。連結性に対する諸アプローチのまとめは、Schlenker (2003: 1 節) を参照。

連結性とは以下のような現象である (西垣内 2023b: 39)。

焦点化の移動を受けるのが「関数名詞句」の内項であって外項ではないことについては、[(i) a] において、発音される構造では右側に現れる量化表現「各大学」が、先行する位置にある代名詞「そこ」を「逆行束縛」する解釈が可能であること、[(i) b] において先行する「秘書」が

がAだ」が指定文と呼べるのか」という問いには、文の概念構造における何らかの条件を満たしていれば、それを指定文と見なせる・呼べる、と答えることになる。もっとも、これは、今のN-意味理論の「[(11)]」に当てはまるものが「指定文」だ」と大差ない答えだと思われることになるかもしれない。

インターフェイスの斉一性と統語論中心主義は、仮定すれば統語論と意味論を強く制約し、理論を組み立てる指針となる。しかし、このことは、これらの想定自体が正しいということは何も保証しない。インターフェイスの斉一性を前提としなければ、意味論におけるユニットについて、「どのようにしてその形式とはたらきを検証できるのだろう」(西垣内 2023a: 40) という疑問は当然あり得るが、文法理論の研究が不可能になるわけではなく、インターフェイスの斉一性だけでなく統語論中心主義をも放棄した文法研究は可能である³⁴⁾(ジャッケンドフ 2002/2006、Culicover and Jackendoff 2005)。もっとも、主流派の生成統語論との接続を模索するN-意味理論が、今後、インターフェイスの斉一性に対してどのような立場を取り、統語論中心主義を否認するかどうかは不明である。さらに、これらを認めるとしても、どこまでが統語構造に透明に写像される意味論に含まれるか、裏返して言うと、どこまでを語用論とみなして文法に入れないかという点でも様々な立場があり得る。焦点投射、「評価」投射、「証拠性」投射、Topic Phrase、Force Phraseなどに反映される意味的要素を文法の範疇に入れない論者は少なくないだろう。

以上、西垣内(2023b: 34)の求める真の説明とはどのようなものかを考察し、N-意味理論の答えが、その想定に収まらない可能性もあることを論じた。もちろん、これが理論言語学における説明とは何かに対する答えであると筆者が主張するわけではない。指定文のような、(特定の理論的前提がない場合には)意味によって規定するしかない現象の説明が、少なくとも生成文法において、西垣内説のような統語論に立脚したものに限られるのか、インターフェイスの斉一性と統語論中心主義を認めない場合にも統語論に立脚したものに限られるのか、N-意味理論の枠内では説明が不可能なのかといった問題が、インターフェイスの斉一性と統語論中心主義の当否とともに、西西論争を先に進める際に議論すべき課題として残されている。

「各学科」より狭いスコープを取る解釈が支配的であることが、それぞれ焦点要素が表示される「関数名詞句」の外項によってc統御される位置から派生しているという構造的連結性(connectivity)によって説明される。

- (i) a. そこ_iのカリキュラムが各大学_iの特徴だ。←[NP 各大学[N_i そのカリキュラム[N 特徴]]]
 b. 少なくともひとりの専任秘書が各学科の要望だ。←[NP 各学科[N_i 1 専任秘書[N 要望]]]

34)「可能である」というだけでなく、実際に指定文の分析を示してみよ、と言われそうである。筆者には、指示参照ファイル理論に基づいた指定文の分析(その一端を山泉 2020aの冒頭で示した)があり、指定文・指定文・同定文など各種コピュラ文の統語構造には差を設けていない。ここで理論の前提から示す余裕はないので、山泉(in prep)をお待ちいただきたい。

4. おわりに

西垣内（2024）は、著者が西山（2003 他）の非飽和名詞等の概念を理解しようと苦闘し、その過程における疑問も表明しつつ、最終的な理解（少なくとも筆者によれば誤解だが）を明示しているという点で非常に貴重な記録となっている。西山（2003）を西垣内（2024）が読解するというコミュニケーションは、本稿が正しければ、成功しなかった。論争を実りあるものにするのは容易ではない。黒田成幸氏と久野暉氏の論争を回顧した田中（2017）によると、この論争の議論は混乱のままに途絶えてしまった（p. 271）とのことである。西西論争のような論争は、どうすれば生産的になるのだろうか（そもそも生産的な議論は、あまり論争と呼ばれないのかもしれないが、そうだとしたら、我々はいかにして非生産的な論争を避けることができるのだろうか）。

少なくとも、誤解があるのにそれが表面化しないままでは、いくら議論を続けても実りは少ないだろう。まずは、双方が誤解の可能性を念入りに潰していく必要がある。我々が行っている高度に理論的な議論は、数万年前からハードウェア的に脳がほとんど進化していない我々人間にとって、そもそも極めて難しいものであろう。理論に基づいた議論では、こちらの立脚している理論を相手も正しく理解している限り、とんでもない異論が出ることは考えにくいから、あまりにおかしく見える議論があったら、理論が大きく誤解されている可能性を疑うべきであるし、翻って、自分の理論に誤解されそうな点がないかを考えるべきである。

その際には、双方の理論の、あまり明示されず前提となっている基礎に気を配る必要がある。論争において議論を深めるには、双方の基礎を互いに理解している必要があるからである。そうでないと、2 ターン目には、もう同じことを繰り返すだけになってしまう。西西論争においては両陣営とも、生成文法家であるから、一見同じ土台に立脚しているようにみえるけれども、全くそうではないことは本稿が明らかにした通りである。どちらの陣営も、相手や読者一般に理論的基礎が明らかになっているとは言い難く、西垣内説における語用論的情報の扱いや、N-意味理論がインターフェイスの斉一性を認めるかどうかは明らかではない。

また、誤解があるかどうかや双方の理論的基礎を確かめる際、書面で行うとすれば、西垣内（2024）のように、理解のプロセスを示しつつ理解を明示することは、第一歩として非常に有効であることが示された（これを行うには紙幅が必要であり、多くの学会誌では不可能である）。次のステップは、誤解していると思った読者が筆者のようにそれを表明することである。もっとも、筆者が西垣内氏の誤解を明確に把握するまでに、西垣内（2016c）を読んでから既に8年もの時が経過している。従来通りの論文によるコミュニケーションによって、このようなプロセスを行うことは、人間の寿命を考えるとあまり現実的ではないかもしれない。情報技術を活かした新たなアプローチが求められる。

とは言え、現時点までの西西論争にも、本稿で詳しく論じた通り、有益な批判がいくつか

見られた。変項名詞句の統語論をめぐる西垣内氏の批判は、N-意味理論（あるいはそれが拡大した N-文法理論とも呼ぶべきもの）にのっての課題を指し示すものであった。一方、本稿では詳しく取り上げていないが、N-意味理論が批判的に論じている西垣内説における語用論的情報の位置付けは、Focus Phrase、Force Phrase などを統語構造に設ける西垣内理論の全体像を示すためにも明確化が求められるものである。変項名詞句の統語論と西垣内説における語用論は、どちらも両陣営が繰り返し問題として持ち出しているものであり、批判に正面から答えることで、実質的な進歩が期待できる。その点で、論争の両陣営は、互いが十分考察してこなかった部分について双方一日の長があり、論争はより有意義なものになり得る。もちろん、実質的な進歩は、理論の小手先の修正では叶わず、その基盤を視野に入れつつ大幅な改訂を厭わない考察が必要になる。西西論争のこれまでの議論の応答では、反論の間違っている部分の指摘はあっても、双方の説が論争によって改善された部分は見当たらない。このままでは双方の説が論争で進歩することは期待できないが、双方が説を改善するための種がまだ応答されていない部分に含まれていると考える。

西西論争のような、立場の違う者研究者同士の困難な対話は、生産的なものになりにくいから行う必要がないと考える読者は少なくないだろう。ここで、誰にとっての生産性かという部分を明示して考える必要がある。論争の当事者にとっては生産的でなくとも、論争は読者の思考を強く刺激し、新たなアイデアをもたらすことが多々ある。黒田久野論争で実際に起こったことである（田中 2024）。

対話の当事者の生産性という観点からも、西山氏主催の慶應意味論・語用論研究会における、長年に渡る N-意味理論研究者達と認知言語学者達との対話に端を発して、少なくとも認知言語学の陣営からは、氏家・田中（2021, 2024）や、筆者の指示参照ファイル理論（山泉 2020ab, 2021ab, 2022, 2023ab）などの成果が出ている。これは論文を通じてではなく、口頭での長時間の議論が可能にしたものであると言える。

最後に、西西論争の検討が示唆する、表面化していない大きな問題を指摘しておきたい。本稿で見たような誤解が査読でも絶えず生じ、正されないままになっているに違いないということである。読者の多くが、投稿した論文に対する査読コメントを読んで、査読者があなたの論文を誤解していることに、憤ったり、絶望したりしたことがあるだろう。³⁵⁾ 通常の査読のような書面でのコミュニケーションにおいては、誤解が表面化することは少なく、正されないことが大半である。査読は意図明示・推論コミュニケーションであるから、究極的に

35) 筆者は、独自の理論による論文を言語学系の雑誌 2 誌に投稿し、リジェクトされた後、哲学系の雑誌に投稿して採用されたことがある。その時の経験では、言語学者による査読は、例文の自然さなど細かい点にコメントが集中している一方で、あまり筆者の理論を理解しているようには思えなかった。それと対照的に、哲学者の査読には、かなり正確な理解に基づいたコメントが多く見られた。哲学者は、前提・立場を共有しない文章を読解することに一日どころではない長があるのだろう。

は悪いのはどちらか一方というよりは相性である。理解されない査読に対して実現が可能な改善策としては、査読者が査読期間中に投稿者に質問ができるようにすることが挙げられる。

参考文献

- Culicover, Peter W. and Jackendoff, Ray. (2005) *Simpler syntax*. OUP.
- Higgins, Francis Roger (1979) *The pseudo-cleft construction in English*. Garland Publishing.
- Jacobson, Pauline (1994) Binding connectivity in copular sentences. In *Proceedings of the Fourth Conference on Semantics and Linguistic Theory*, Cornell Working Papers in Linguistics.
- Langacker, Ronald W. (1985) Observations and speculations on subjectivity. In *Iconicity in Syntax*, John Haiman (ed.), 109-50. Amsterdam: John Benjamins.
- Nishigauchi, Taisuke. (2011) Deriving fragments. *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin*, 14: 81-106.
- Schlenker, P. (2003) Clausal equations (A note on the connectivity problem). *Natural Language & Linguistic Theory* 21: 157-214.
- Sharvit, Yael (1999) Connectivity in Specificational Sentences. *Natural Language Semantics* 7: 299-339.
- 氏家 啓吾・田中 太一 (2021) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文への認知文法的アプローチ」『東京大学言語学論集』 43: 327-347.
- 氏家 啓吾・田中 太一 (2024) 「名詞の(非)飽和性とカテゴリー化」『日本語文法』 24 (1) : 20-36.
- 窪田 悠介 (近刊) 「形式意味論研究における理論構築について」山泉実・窪田悠介編『言語学を科学哲学する』東京：大修館書店.
- 郡司 隆男 (2016) 「項を2つとる名詞コピュラ文の形式意味論的分析」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』 19: 17-28.
- ジャッケンドフ, レイ (郡司隆男訳) (2002/2006) 『言語の基盤：脳・意味・文法・進化』岩波書店.
- 田中 太一 (2017) 「日本語受身文をめぐる黒田久野論争について」『東京大学言語学論集』 38: 271-285.
- 田中 太一 (2024) 「誤解の効用とその限界：黒田久野論争をめぐる」ワークショップ『論争する言語学の過去・現在・未来：議論を深め、実りあるものとするために』口頭発表. 日本言語学会第169回大会.
- 西垣内 泰介 (2016a) 「「指定文」の統語的特性」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』 19: 101-122.
- 西垣内 泰介 (2016b) 「「変項名詞句」としての「量関係節」「潜伏疑問」「主要部内在型関係節」」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』平成27年度 研究報告書 (3) : 118-138.
- 西垣内 泰介 (2016c) 「「指定文」および関連する構文の構造と派生」『言語研究』 150: 137-171.
- 西垣内 泰介 (2017) 「「変項名詞句」の統語構造」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』 20: 127-142.
- 西垣内 泰介 (2018) 「「視点シフト」といわれる「非飽和名詞」」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』 21:

151-169.

西垣内 泰介 (2019a) 「「地図をたよりに」の構造と派生」『日本語文法』19 (1) : 37-53.

西垣内 泰介 (2019b) 「「地図をたよりに」統語論・意味論の接点を探る」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』22: 59-74.

西垣内 泰介 (2020) 「「潜伏疑問」の構造と派生」『言語研究』157: 37-69.

西垣内 泰介 (2023a) 「「指定文」であるもの、ないもの」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』26: 33-47.

西垣内 泰介 (2023b) 「「指定文」の焦点要素」『日本語文法』23 (2) : 36-52.

西垣内 泰介 (2024) 「「非飽和性」の不合理」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』27: 17-30.

西川 賢哉 (2013) 「二重コピュラ文としての「A は B が C (だ)」構文: 「象は鼻が長い」構文を中心に」
西山佑司 (編) 『名詞句の世界: その意味と解釈の神秘に迫る』 pp. 167-211. 東京: ひつじ書房.

西山 佑司 (1990) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文について—飽和名詞句と非飽和名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』22: 169-188.

西山 佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』東京: ひつじ書房.

西山 佑司 (2005) 「コピュラ文の分析に集合概念は有効であるか」『日本語文法』5 (2) : 74-91.

西山 佑司 編著 (2013) 『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』東京: ひつじ書房.

西山 佑司 (2019) 「意味論における内在主義と外在主義」慶應言語学コロキウム配布資料.

西山 佑司 (2023) 「潜伏疑問と指定文—「関数名詞」説の批判的検討—」『日本語文法』23 (2) : 3-18.

西山 佑司・西川 賢哉 (2018) 「指定文の分析において「中核名詞句」なる概念はどこまで妥当か」『言語研究』154: 177-204.

峯島 宏次 (2013) 「自由拡充をどのように制約するか」西山佑司 編著. 『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』 pp. 513-557. 東京: ひつじ書房.

山泉 実 (2010) 『節による非飽和名詞 (句) のパラメータの補充』博士学位論文 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻.

山泉 実 (2013) 「非飽和名詞とそのパラメータの値」西山佑司編著 『名詞句の世界』ひつじ書房.

山泉 実 (2020a) 「指示参照ファイル理論序説」『日本語・日本文化研究』30: 1-28, 大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻.

山泉 実 (2020b) 「認知的視座からの意味論と形而上学」『日本語・日本文化研究』30: 29-52, 大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻.

山泉 実 (2021a) 「潜伏疑問名詞句再考: N-意味理論の分析の批判的検討」『言語文化研究』47: 101-121. 大阪大学大学院言語文化研究科.

山泉 実 (2021b) 「変項名詞句の階層を再考する—N-意味理論の分析の批判的検討と指示参照ファイル理論による分析—」『東京大学言語学論集』43: 電子版 49-75.

山泉 実 (2022) 「潜伏命題名詞句再考」『基礎言語学研究』1: 1-37.

山泉 実（2023）「名詞句の自由拡充再考—問題の指摘と指示参照ファイル理論による分析—『科学哲学』

55（2）：89-110.

山泉 実（in prep.）『指示参照ファイル理論：名詞句の認知意味論と認知語用論（仮）』

Untangling the Debate between Dr. Nishigauchi and Dr. Nishiyama:
Focusing on Dr. Nishigauchi's (Mis)interpretation of the
Notions of Unsaturated Nouns and Variable Noun Phrases

Minoru YAMAIZUMI

Taisuke Nishigauchi and Yuji Nishiyama have engaged in a prolonged debate across various linguistic platforms in Japan, marked by numerous misunderstandings and inconsistencies that have hindered productive discourse. This paper aims to clarify these issues, providing readers with a clearer understanding and framework to evaluate the debate objectively. Rather than aligning with either side, or introducing a third perspective, I seek to identify and elucidate the key discrepancies between the two scholars to foster more fruitful future discussions. The debate encompasses topics such as specificational sentences, concealed questions, and the theoretical constructs used to analyze these phenomena. This paper specifically examines Nishigauchi's interpretation—or misinterpretation—of Nishiyama's concepts of unsaturated nouns and variable noun phrases, exploring the origins of these misunderstandings. Through this analysis, I aim to highlight the factors that contribute to unproductive scholarly debates, both in linguistics and academia at large.